私たちの町の文化財　池のほとりの不思議

■第２話　味生池を探せ!!

　このコーナーでもよく取り上げてきた「味生池(あじうのいけ)」。なんとなくこの付近・・・と思っているけど、実際はどこにあったのでしょう。この謎を探っていきます。

　味生池が文献に最初に登場するのは『続日本紀』に記載されている名臣・道君首名（みちのきみのおびとな）の治績中に、肥後国に味生池を築くと記されています。それ以上詳しい記載はありませんが、江戸時代に編纂された多くの地誌に、味生池は谷尾崎・花岡山・独鈷山に囲まれた付近との記載があります。

かつての井芹川は、横手から花岡山東側を通り、ほぼ現在の坪井川の流路（坪井川は熊本城付近で白川と合流していた）で高橋へ流れていました。現在の流れになるのは昭和6年のことです。ですから、県道237号線付近に築堤をして谷尾崎川や平川からの水流を集めて、標高約５mラインが汀線となる範囲に池があったのか・・・と推定しています。周辺の小字名を見ると、池の中にあたる部分に「釜清水」「汁免」など、池の上流端に「塘口」、堤のすぐ内側には溜まった土砂を掻き揚げたであろう「泥上」などが見られます。もちろん、池上町の池は味生池のことです。このことから、西回りバイパスにかかる橋は「味生大橋」と名づけられたのです。熊本市文化振興課　師富国博氏

池上小学校校舎の壁面には味生の池伝説に出てくる龍が立ち上り

毎年二月には池上ふれあいフェスタ「味生祭」が開催されてるモン

平成30年2月　みにくま第178号に掲載